

4 果 樹

項 目	作 業 内 容												
<p>(1) 温州ミカンの あら摘果</p> <p>(2) 温州ミカンの マルチ栽培</p>	<p>(今月の作業のポイント) 温州ミカンのあら摘果 温州ミカンのマルチ設置 中晩柑類のあら摘果 モモの収穫 灌水、土壌管理</p> <p>本年は梅雨期の降雨、日照時間等の影響から、生理落果が助長され、着果量は園地間・樹体間によるバラツキが大きい。樹ごとの着果・新梢量に応じた早期の摘果を行い、L・M果主体の高品質果実生産を目指す。 着果量が少ない樹は、あら摘果は見送り9月以降の仕上摘果や樹上選果で調整する。 着果が中程度の樹は、8月下旬以降の仕上げ摘果に重点を置き、結果量を調整する。 着果量が多く、新梢発生が少ない樹は、樹冠外周部や立枝の大玉果を中心に、樹冠上部2～3割程度を全摘果する。7月上旬をめぐりに行い、早期に夏芽母枝を確保する。</p> <p>摘果作業などのため敷設が遅れがちであるが、高糖度な果実を生産するため透湿性シートの導入を推進する。点滴チューブを配置してマルチドリップ方式とすれば、マルチ敷設後の管理が楽である。小玉果や酸高果の発生を回避するため、マルチ敷設後は過乾燥を避け、降雨、樹体の様子に注意しながら適宜灌水する。 被覆前には集排水路を設置するなどして、大雨時の災害防止対策を行う。なお、土壌が極端に乾燥している場合は、10mm程度の灌水の後に被覆する。 被覆後は、マルチ資材が風で飛ばされないよう、株元や端部を専用金具や土嚢等で固定する。 なお、鋼管などを利用して巻き上げ方式にすると、シートの開閉作業が容易となり、効率的である。</p> <div data-bbox="959 1417 1401 1720" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: center;">写真1 マルチ栽培</p> <p style="text-align: center;">表1 マルチの被覆時期の目安</p> <table border="1" data-bbox="638 1854 1272 2031"> <thead> <tr> <th>種類</th> <th>全面マルチ栽培</th> <th>部分マルチ栽培</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>極早生</td> <td>7月上旬～下旬</td> <td>6月上旬～下旬</td> </tr> <tr> <td>早生</td> <td>7月上旬～下旬</td> <td>6月中旬～7月上旬</td> </tr> <tr> <td>普通</td> <td>7月中旬～8月下旬</td> <td>6月中旬～7月上旬</td> </tr> </tbody> </table>	種類	全面マルチ栽培	部分マルチ栽培	極早生	7月上旬～下旬	6月上旬～下旬	早生	7月上旬～下旬	6月中旬～7月上旬	普通	7月中旬～8月下旬	6月中旬～7月上旬
種類	全面マルチ栽培	部分マルチ栽培											
極早生	7月上旬～下旬	6月上旬～下旬											
早生	7月上旬～下旬	6月中旬～7月上旬											
普通	7月中旬～8月下旬	6月中旬～7月上旬											

項 目	作 業 内 容				
(3) 中晩柑類のあら摘果	<p>伊予柑のあら摘果は直花果、奇形果、傷果、内成り果、極小果等を除去し、有葉果を主体に残す。早期に強く摘果すると果皮が粗く大玉となってしまうため、葉果比で 50 枚程度に調整する。</p> <p>不知火、清見、天草、甘夏柑などは、大玉果生産と樹勢維持を目的に早期に摘果を行う。直花果、奇形果、傷果、極小果等を除去、有葉果を主体に残す。</p>				
	表 2 中晩柑類の摘果の目安				
	品種	あら摘果	仕上摘果		留 意 事 項
			時期	葉果比	
	伊予柑	6 月下	8 月下	80-100	<ul style="list-style-type: none"> ・着果が少ない樹は仕上げ摘果を中心に行う ・5~7 枚の有葉果を残し、葉果比で 50 枚程度に調節する
	不知火	6 月中	8 月中	100-120	<ul style="list-style-type: none"> ・早期摘果に重点をおき、強めに摘果する ・7~8 枚の有葉果を残す
	清見	6 月下	8 月中	80-120	<ul style="list-style-type: none"> ・着果過多樹は早期摘果に重点をおく ・5~6 枚の有葉果を残す
	はるみ	6 月中	8 月中	100-120	<ul style="list-style-type: none"> ・樹冠上部 1/3 を全摘果し、夏芽の発生を促す ・最終の着果量の 8 割程度まで摘果する
天草	6 月下	8 月中	80-120	<ul style="list-style-type: none"> ・早期摘果に重点をおき、強めに摘果する ・樹冠内部や下部は葉果比を多くし、強めに摘果する 	
紅まどんな	6 月下	8 月中	80-100	<ul style="list-style-type: none"> ・早期摘果に重点をおき、強めに摘果するが、夏秋梢を発生させないように勘案する ・ヘソ有り果は早期には見分けにくいので注意する 	
甘平	6 月下	8 月中	80-100	<ul style="list-style-type: none"> ・本品種の最大の問題点である裂果を考慮しヘソ有り果や果頂部に亀裂のある果実は摘果する ・8 月から 10 月中にかけて裂果果実を除き、最終的には葉果比 120 を目安に樹上選果する。 	

項 目	作 業 内 容
(4) 土壌管理	<p>ア 灌 水 温州ミカンは、7月は果実の肥大期であり、十分な土壌水分が必要である。10日間程度降雨がなく、葉が下垂し始める予兆があれば、10mm程度の灌水を適宜行う。 中晩柑類は、他品種より果皮や果実からの蒸散が多く、土壌の乾燥による酸高が懸念される。乾燥しないよう早めの灌水が必要となる。乾燥状態が1週間以上続く場合は20～30mm程度の灌水を行う。 落葉果樹(カキ、キウイフルーツ、ナシ、ブドウ)は、乾燥が続くと、葉の萎凋や樹勢の低下、果実の肥大が抑制されるため、20mm程度の灌水を適宜行い、果実の肥大と樹勢維持を図る。キウイフルーツは蒸散量が多いうえ、今月までに全果実肥大量の70%程度まで肥大するため、降雨が少ない場合は定期的な灌水を実施する。</p> <p>イ 夏草の除去 夏草による樹との養分や水分の競合を避けるために除草を行う。</p>
(5) モモの収穫	<p>モモ(日川白鳳、あかつき等)の収穫期を迎える。モモの糖度は収穫前2週間程度で急激に高まる。透湿性マルチ等で余剰水を排除し、光環境を改善することで光合成の活性化、着色の促進を図り高品質果生産に努める。収穫は果皮の地色が抜けて、淡黄色から白色になり、果頂部が紅色に着色した果実から、数回に分けて作業を行う。 モモは収穫時の気温が高いと軟化しやすく、日持ち性も悪くなるため、気温の低い時間帯に収穫する。また、収穫した果実は直射日光を避け、風通しの良い場所に保管、選果する。</p>
(6) 病虫害防除	<p>ア 柑橘類</p> <p>(ア) かいよう病 6月に薬剤防除を行っていない園や多発園では、7月上旬に必ず防除する。また、発病果や発病葉は除去し、圃場内の病原菌密度の低下を図る。恒久的には防風垣や防風ネットを整備する。 ミカンハモグリガの食害痕は本病の感染源となるため、防除を徹底する。</p> <p>(イ) 黒点病 黒点病菌が降雨によって果実に伝染するため、伝染源である枯れ枝を除去する。前回防除実施後の積算降雨量が200～250mmに達した時、または前回防除後30日以内に次回散布を行う。 現在、昨年と同様に発病果は多く、7月は多いと予想される。特に中晩柑類では発生しやすいので注意する。</p>

項 目	作 業 内 容
	<p>(ウ) ミカンハダニ 短期間で増殖を繰り返して急激に密度を高めるため、今後の発生状況に注意し、園内の早期多発樹で1葉平均雌成虫数が2～3頭に達したら防除する。ミカンハダニは薬剤抵抗性が高いので、同一薬剤の使用を避け、各種農薬を計画的に散布する。</p> <p>(エ) ミカンサビダニ 7月は果実への寄生が多くなる時期である。高温乾燥条件で多発する傾向にあるため、昨年多発した園地では初期発生に注意し、7月上旬～中旬に防除を行う。</p> <p>(イ) 落葉果樹</p> <p>(ア) カキ炭疽病 園内をこまめに巡回し、発病枝は早期に除去する。また、幼果への感染防止のため、梅雨期の薬剤防除を徹底する。</p> <p>(イ) ブドウベと病 感染後4～7日で発病するなど短期間に被害が拡大するため、多雨の後には防除を徹底する。感染源となる罹病葉をできるだけ除去し、園外に持ち出し処分する。</p> <p>(ウ) モモ灰星病 収穫期前の降水量、降雨日数が多いと多発するので、防除を徹底する。被害果は早期に摘除し、園内に放置せず土壌に埋めるなどする。</p>

(作成 果樹研究センター)